

表現することが生きる力になる。

釜ヶ崎で、詩、ダンス、ドラマの「表現のワークショップ」

NPO法人こえとことばとこころの部屋

「無縁社会」といわれる現代、野宿者は路上から脱出して、その多くが単身高齢者となり、人とのつながりが希薄な孤立化の問題に直面している。

「表現」とは、根本的な「生」にかかわるもの

釜ヶ崎のほずれにある商店街「動物園前一番街」に足を踏み入れると、そこはもう「昭和」のムード漂う世界。

ニンギンシャツ姿のおじさんが悠々と自転車ですれ違う。そんなちよつとディープな商店街の一角に、ココロームのカフェはある。



代表 上田 假奈代さん



まるで大家族の食事風景さながら。時には、常連の「おっちゃんたち」も食をともにするという。

「釜ヶ崎のおっちゃんたちは孤食の人が多いから、誘っても最初は恥ずかしがる。でも、そのうち食卓に座るようになる人もいて、『久しぶりに人とご飯を食べた』と言って泣き出した人もいましたね」と上田さん。

ココロームは、アートと社会のかかわりをテーマに、表現活動を介してさまざまな人々が立場を越えてつながることで、社会や地域の問題解決に向けた取り組みを行ってきた。

舞台に立つてもらったことも、その後のホームレス詩人や紙芝居劇グループ「むすび」などの公演につながっていた。元ピアノストのホームレスの方に演奏を依頼した時には、『その日がくるまで、生きる理由ができました』と言われ、表現することが生きる理由になることを教えてもらいました。

高齢者の孤立化防ぐ、おしゃべり相談、健康相談、表現活動

現在、ココロームは商店街のカフェと交流の場である「カマン！」

メディアセンター」の2拠点を中心に活動。11年からは拠点を飛び出し、釜ヶ崎の中心にある施設で、詩やダンス、ドラマといった「表現のワークショップ」を行っている。あえて街中に出て行ったのは、最近の釜ヶ崎の変化が理由だったとスタッフの植田裕子さんは言う。

「ココロームは釜ヶ崎のほずれにあるのですが、ある時から訪れる人がめっきり減って、その背景に高齢化があることに気づいた。よく顔を見せてくれていた人も、ココロームまでの数百メートル歩くのがしんどくなっていました」

元野宿者の高齢化による孤立を防ぐ目的で、同年にファイザーの助成を受けて企画され、講師の話を聞いた後に参加者で生活相談のおしゃべりをする「えんがわおしゃべり相談会」、商店街の中で血圧測定と口腔ケアを行う「えんがわ健康相談会」を合わせた3プログラムの事業の一つとして実施された。



表現のワークショップ



健康相談



釜ヶ崎芸術大学

NPO法人 こえとことばとこころの部屋 (ココローム)

03年に、大阪市の新しい芸術拠点づくり「新世界アーツパーク事業」への参画を機に設立。04年にNPO法人となり、08年に拠点を釜ヶ崎に移転。釜ヶ崎に暮らす方の表現の場づくりをはじめとし、アートを中心とした多彩なイベント・ワークショップを手がけている。

ホームページ http://www.cocoroom.org/

がアートではなく、一人ひとりの言葉や会話、生活そのものがその人の表現であり、互いにかかわり合い、与え合う関係こそが人生を豊かにするアートだと思っただけ。立派なアーティストも、ホームレスも、表現の舞台に立てば、誰もがひとり。その人に代わりはいない。その平等さにおいて、私たちはあらゆる人とかわるうとしてきました」

ホームレス詩人、紙芝居劇グループの公演。表現が生きる理由に

ココロームの設立は、2003年。活動のはじまりは、詩人でもある上田さんのある体験がきっかけだ。母親のもとで3歳から詩作を始め、コピーライターや調理師として働くかわら、詩の朗読を社会化する活動で脚光を浴びていた上田さんに、ある時、一人の大学生が「詩を仕事にしたいんです」と相談してきた。「正直、無理でしょうと思ったのね。だって、そんなことができるのは谷川俊太郎さんだけじゃない？」

その彼が1週間後に飛び降り自殺したと知ったのは、少し経ってからのことだ。あの時、「大変だけれど、がんばりや」の一言がなぜ言えなかったのか。そのことが悔やまれた。「もうそれから、もんどり打って考えたんです。詩とは何か、仕事とは何か。誰にでも人生をあらわすことができるのは、詩と表現だけじゃない。」



スタッフ 植田 裕子さん

で、何か大切な話を聞いてしまった、どうしたらいいの？と思いつきながら、それを受け止めて、応答しようと思いつきながら仕事をしました。結局、社会が大きくガラッと変わることはない。だからこそ、このようにも、互いにかかわり合い、小さな出会いや気持ちの揺れをしつかり見つけながら少しずつ変わっていくしかない。何かを表現するということ、自分で考え、選択する人生そのもので、自分の中の他者を動かすことです。それが誰かにつながっていく可能性になり、生きる力になると思っています」

また、この経験は美術家の森村泰昌さんや哲学者、天文学者ら多彩な講師を招いて、42コマの授業を開いた「釜ヶ崎芸術大学」(昨年11月〜今年2月)の大きなヒントともなった。「ワークショップの月1回というペースは、不安定な生活をしている方にとってはどうなるかわからない未来に感じられるらしく、もっと日常の生活リズムに合わせた短いスパンで表現の機会をつくりたいという思いが釜ヶ崎芸術大学開校につながりました」

13年には、再びファイザーの助成を受けて、「生活相談」「健康相談」「表現活動」の事業を実施。無縁社会といわれる現代において、特に釜ヶ崎のような地域では3つのプログラムを継続することが何より重要だと考えている。

代表の上田さんは、声なき声に耳を傾け、それに応答しようとしてきたことがココロームの今につながってきたと話す。「私は、一つひとつの出会いの中

ファイザープログラム ~心とからだのヘルスケアに関する市民活動・市民研究支援 製薬企業ファイザー株式会社が、2000年9月に創設した社会貢献プログラム。医薬品の提供だけでは解決することのできない「心とからだのヘルスケア」にかかわる様々な社会的課題に取り組む市民活動・市民研究への助成により、「心もからだも健やかな社会」の実現を目指す。創設以来、290件のプロジェクトを支援。特定非営利活動法人市民社会創造ファンドの企画・運営協力のもと、市民活動のさらなる発展を応援している。 http://www.pfizer.co.jp/

